

上原 美術館 通信



編集・発行 公益財団法人上原美術館
2019年12月18日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



仏教館では上原コレクション名品選2として、仏教美術を語る上で欠かせない存在である写経を軸に、仏教館の名品をご紹介します。

仏像をはじめとする仏教美術の数々は、仏教の教えに基づいて作られており、その仏教の教えを記したものが、お経です。そこには、仏の住む世界の情景や、ご利益など、様々な情報が記されています。そして、お経を作るには一文字ずつ、丁寧に書写していくことが求められます。こうして祈りを込めて書写したお経を、「写経」と呼びます。

写経を作ることは仏教を広めることに繋がるため、功德があるものとして歴史上頻繁に行われてきました。その中でも、日本で写経が盛んに行われた時代のひとつが奈良時代です。この時代の写経として、かつて、奈良・東大寺に納められていたと思われる《紫紙金字華嚴經断簡》(8世紀)を展示します。

《紫紙金字華嚴經断簡》は、濃い紫色で染めた紙に、金字で『華嚴經』を書写した写経です。このように紫紙に金字が、きっちりとした書体で書かれているところに、奈良時代の写経の特徴が表れています。この写経は今から約1250年前に書かれたものですが、金字の輝きは未だに失われず、紫紙から文字が浮かび上がってくるかのような気があります。

さて、この写経は断簡と呼ばれるように、写経の一部分だけが切り取られた状態です。もともとは巻物だったのですが、ある時点の所有者が一枚だけ切り取り、掛軸に仕立て直したものが現在の姿です。そのため、この写経は文章の途中であって、タイトルが書かれていません。

それではなぜ、この写経が『華嚴經』だということがわかるのでしょうか。その秘密は登場人物にあります。この写経には『華嚴經』に登場する「善財童子」という少年の名前が見られます。内容は善財童子が、53人の善知識(教えを導いてくれる存在)を訪ねて求法の旅に出るというストーリーです。本展でご紹介する《紫紙金字華嚴經断簡》で語られているのは、善財童子が険しい山奥で修行している勝熱婆羅門という善知識に出会う場面です。善財童子が教えを乞うと、婆羅門は炎が燃えさかる谷間に身を投げれば浄化され、願いは成就されるだろうと答えます。それに対して、善財童子は婆羅門が実は魔物ではないかと疑い躊躇しますが、仏の声に導かれることで疑念を払しょくします。そして、炎に身を投じるものの、仏の加護で無事に教えの真髄を得るといふ、ドラマティックな場面が表されています。

本展ではこの他にも《紺紙金字金剛三昧経巻上(神護寺経)》(12世紀)や、初公開となる静岡県ゆかりの写経である《遺教経》(永享4年 [1432] / P4コラム参照)など、当館所蔵の写経の数々を一堂に展示します。あわせて《十一面観世音菩薩立像》(10世紀)などの仏像を展示します。

写経には、祈りを込めて書写された文字の美しさや、写経をいろどる装飾のきらびやかさ。そして、仏教の教えを伝える物語や、様々な人の手を経て伝来した歴史など、様々な魅力が備わっています。写経を通して見えてくる仏教美術の世界観をお楽しみ下さい。(菅野)



《紫紙金字華嚴經断簡》奈良時代(8世紀)



《紫紙金字華嚴經断簡》部分
※右から1行目と6行目に善財童子の名前が確認できる

このたび近代館では、アルベール・マルケ《ルーアンのセヌ川》(1912年)を新たに収蔵しました。本作の収蔵を機会として、本展覧会では、フランス近代絵画にとって欠かせない、セヌ川というテーマで上原コレクションをご紹介します。

《ルーアンのセヌ川》は、マルケが1912年に滞在したルーアンのオテル・ドゥ・パリの一室から描かれています。ルーアンはパリから北西に120kmほど離れたノルマンディー地方に位置し、古くからセヌ川を利用した水運の拠点として栄えた街です。

マルケは、その水運の街ルーアンの中でも、特に賑わいをみせていた河岸を描いています。画面を横切る

ように大きくセヌ川が配置され、波止場の倉庫街や、対岸で煙を上げる煙突群、人々が行き交うポイエルデュ橋が捉えられています。曇り空のにぶい輝きはやわらかな光をセヌ川に落とし、水面は穏やかな光に満たされています。川面には橋の影とともに、橋脚がうっすらと映り込み、川のゆったりとした流れを感じさせます。マルケのセヌ川はほとんどモノトーンのようにありながらも、その描写には多彩なニュアンスを感じさせます。

こうしたセヌ川の情景は19世紀以降、モネやルノワール

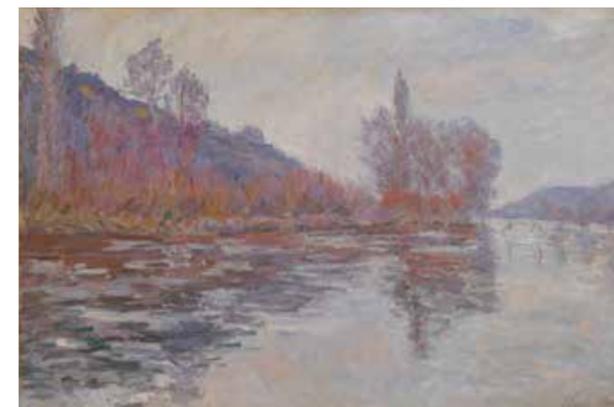


アルベール・マルケ《ルーアンのセヌ川》1912年 新収蔵初公開

ら印象派の画家たちによって、たびたび風景画に取り上げられてきました。モネの描いた《ジヴェルニー付近のセヌ川》は、水面に木々が映り込む様子や、揺れる水面、大気の湧き上がるような生き生きとしたタッチで捉えられています。川辺の変化に富む輝きは画家たちを惹きつけ、印象派たちの鮮やかな色彩による表現を養ってきました。

本展ではマルケや印象派の画家たちのほか、ボナール、ドラランが描いたセヌ川と、画家たちが暮らしたパリ市街の風景を中心に、上原コレクションの数々をご紹介します。

(齊藤)



クロード・モネ《ジヴェルニー付近のセヌ川》1894年

上原美術館・仏教館のコレクションに、新たに静岡県ゆかりの写経が収蔵されました。コレクションに加わったのは、永享4(1432)年の奥書がある《遺教経》1巻です。《遺教経》は正式名称を『ぶつすいはつねほんりやくせつぎょうかいぎょう 仏垂般涅槃略説教誡経』と言う経典で、一般的に「ぶつゆいぎょうぎょう 仏遺教経」、「遺教経」と呼ばれることが多いです。その内容はお釈迦様が入滅に際して弟子達に説いた、最後の教えを記録したものとされます。

上原美術館所蔵の《遺教経》は縦26.2cm、長319.9cmで、写経としては比較的短い部類に入ります。一紙の長さは34~34.3cmほどで、一紙につき18行、1行につき最大17文字が薄めの墨で書写されます。一方で、表紙には紺紙が用いられ、金泥で蓮華の装飾が描かれています。

この写経は奥書より、室町時代の永享4(1432)年に「しやくしけいよう 釈氏慶陽」によって書写されたことがわかります。《遺教経》が永享4年に書写された理由としては、

「するがこくうどくんはちまんぐうごぶだいじょう 駿河国有度郡八幡宮」の「ごぶだいじょう 五部大乘経」のうち、「遺教経」が失われたため、新たに加えられたという経緯が記されています。

ここに言う「有度郡八幡宮」とは、現在の静岡市駿河区八幡山にある八幡神社に該当すると思われます。この八幡神社には、記録から延応2(1240)年に、鎌倉で書写された「えんおう 五部大乘経」が、かつて存在したことがわかっています。「五部大乘経」とは「華嚴経」、「大集経」、「大品般若経」、「法華経」、「涅槃経」の主要な五つの経典で構成されているセットの総称です。この鎌倉時代に施入された「五部大乘経」の修繕もあわせて、永享4年に「遺教経」が追加されたと思われます。

永享4年の時代、「有度郡八幡宮」の一带は、駿河今川氏の領地でした。かつて八幡宮の裏山には「や はたやまじょう 八幡山城」という山城があり、4代目当主「しまがわのりまさ 今川範政(1364-1433年)」の時代に建てられたと考えられています。このような場所に伝来した

写経であることを考えると、《遺教経》を書写した慶陽は、今川氏周辺の人物である可能性が考えられるでしょう。慶陽が名前に冠している釈氏(釈子)とは、お釈迦様の弟子、すなわち出家者を指す言葉でもあります。お釈迦様の遺言とも言える《遺教経》において、釈氏と名乗るところに、慶陽のお釈迦様に対する思いが感じ取れるような気がします。また、謙遜でしょうか、奥書には、自らを省みて恥じるという意味合いの「ざん 慚」という字を用い、自身の筆跡を「はじる」という一文を添えています。

《遺教経》は「上原コレクション名品選2」(2020年1月18日~4月12日)にて展示いたします。ぜひ、この機会にご覧ください。

上原美術館では、2020年1月18日より展覧会『上原コレクション名品選2』を開催します。その中でも特にご紹介したいのが、知られざる巨匠アルベール・マルケ(1875-1947年)の作品です。

アルベール・マルケは1875年にフランス南西部の街ボルドーに生まれ、10代でパリに出てからは、セーヌ川の流れる市街風景を数多く手がけました。彼が最晩年に描いた作品も、やはり、パリの情景とセーヌ川でした。当館が所蔵する《冬のパリ、ポン・ヌフ》(1947年頃、図1)もそうした作品のひとつです。

本作は、マルケが終の棲家としたアトリエからの眺めが描かれています。彼のアトリエは、セーヌ河岸に建つアパルトマンの6階で、ここからはセーヌ川とそこに架かるポン・ヌフや、ノートルダム大聖堂などが建つシテ島を見ることができました。マルケはこのアトリエを「パリで一番眺めのいいところ」と言って、終生飽きることなく見つめ続けていました。

《冬のパリ、ポン・ヌフ》は、まさにそうした彼の愛した景色で、雪の積もるポン・ヌフと、鈍い緑色の空、僅かに水面を見せるセーヌ川が描かれています。画面上部にはうっすらと百貨店サマリテーヌや建物が立ち並ぶ様子が見え、画面中ほどのポン・ヌフ広場にはかすむようにアンリ4世の騎馬像が建っています。描写は極めてシンプルで、いずれも簡潔に対象を捉えています。例えば、画面左下のポン・ヌフを走る車(図2)は、ほとんど単色の簡素な筆遣いで描写されています。そこに、マルケが白い絵具を、僅かに添えるだけで、屋根とボンネットに雪を積もらせた車となり、生き生きと命を吹き込まれたようになります。こうした表現は、一見、印象派の画家たちが、僅かな筆跡だけで対象を表現した手法を思わせませぬ。このような点が、彼が「遅れてきた印象派」とも呼ばれた理由の1つかもしれません。橋を行き交う人々もグレーの絵具を一塗りしただけで表現されて

いますが、不思議と冬路を急ぐ人々の息遣いまで感じられるようです。

画面全体の色数は多くありませんが、やや赤みを帯びた画面下部の色調から、画面上部へといくにつれて青みを帯びた色調へと微妙に変化していきます。ここでは、色彩が生み出す遠近感が、奥へと遠ざかっていく道路の描写、画面下部で道路を断ち切る構図と相まって、画面に深い空間を生み出しています。

曇った雪の日のパリの情景を、限られた色数や筆致で描ききった本作には、マルケの対象の本質を掴みきる稀有な特質を見ることができるといえます。シンプルな描写に冬のパリの魅力を余すところなく捉えたマルケ最晩年の作品をご覧ください。



《遺教経》(部分) 永享4(1432)年

(奥書)
駿河国有度郡八幡宮之五部大乘経之内遺教経失却之歳尚矣爰永享壬子春王三月釈氏慶陽筆蹟雖慚後見書以補其闕者也

参考文献
・『静岡市史 原始・古代・中世』(静岡市役所、1981年)
・湯之上隆「鎌倉期駿河府中の宗教世界—駿河国度郡八幡神社旧蔵五部大乘経をめぐる—」(同『日本中世の地域社会と仏教』所収、思文閣出版、2014年)



図1 アルベール・マルケ《冬のパリ、ポン・ヌフ》1947年頃



図2 図1の拡大図

これからのイベント

学芸員によるギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会の内容について、展示室で学芸員が作品を見ながらお話しします。

日時 会期中の毎月第3土曜日 11:00～/14:00～ 所要時間約30分ずつ

会場 上原美術館展示室

参加方法 当日、仏教館にお集まりください。 ※要入館券、予約不要

学芸員によるレクチャー(ミニ講座)

開催中の展覧会をより深く楽しむ講座です。画像を交えながら、担当学芸員が展覧会の内容や作品にまつわるお話をします。

講座 マルケとその友人たち 講師 齊藤陽介(当館学芸員)

日時 2020年2月22日(土)13:30～15:00

講座 古写経の魅力 講師 菅野龍磨(当館学芸員)

日時 2020年3月7日(土)13:30～15:00

会場 上原美術館・会議室

定員 各定員40名 ※いずれも先着順、要予約、要入館券

参加方法 ①お名前 ②ご住所 ③お電話番号 ④参加人数(2名様まで)

⑤参加希望の講座名を明記の上、郵便はがき、もしくはEメール
(info@uehara-museum.or.jp)にてお申込みください。



開催中の展覧会

伊豆市共同企画展「伊豆をめぐる名画—横山大観、安田靫彦を中心に—」

会期：2019年10月12日(土)～2020年1月13日(月・祝)

伊豆という言葉は、輝く海、険しい山、温泉、歴史、文学など、さまざまなイメージを思い起こさせます。豊かな伊豆の自然と文化は、多くの日本画家たちをも惹きつけてきました。明治41(1908)年、奈良で古画を学ぶ安田靫彦は、胸を病んで帰京を余儀なくされます。そのとき、旅館を営む友人の相原沐芳の勧めにより、伊豆・修善寺で静養することにしました。静養中に研究を重ねて自らの画風を見出した靫彦は、その後もたびたびこの地を訪ね、画家仲間の今村紫紅や小林古径、速水御舟らも集まるようになりました。本展では、伊豆市が所蔵する絵画を通じて、伊豆の魅力、そして日本画の魅力をご紹介します。

現在は後期展を開催中で、横山大観の《神州第一峰》(図1)、安田靫彦《鴨川夜情》、川端龍子《湯浴》(図2)などを公開しています。



図1



図2

展覧会カタログ発行のお知らせ

開催中の展覧会「伊豆をめぐる名画—横山大観、安田靫彦を中心に—」のカタログを発行しました。展覧会で展示をした伊豆市が所蔵する日本画作品を掲載。修善寺に集まった画家たちのエピソードなどのコラムも収録しています。1冊500円で販売。詳細はお電話(0558-28-1228)またはEメール(info@uehara-museum.or.jp)にお問合せください。



活動報告

ミニ講座

「伊豆をめぐる名画」2019年11月8日、12月14日 当館会議室

伊豆市との共同企画展「伊豆をめぐる名画—横山大観、安田靫彦を中心に—」で展示されている作品にちなんで、当館の土森智典主任学芸員が、伊豆・修善寺の魅力に惹きつけられた画家たちのエピソードを、画像を交えてお話ししました。

講演会

「インドの仏像の成立」2019年11月24日 下田セントラルホテル

毎年、西洋や東洋の美術に関する内容を、専門の方をお招きして開催している講演会です。今年度は、インド仏教学をご専門とされている石上善應氏に、インドの仏像などを中心にお話いただきました。

授業入館

下田市立稲穂小学校 2019年9月17日、南伊豆町立南伊豆中学校 11月5日

稲穂小学校6年生と、南伊豆中学校2年生の皆さんが、修学旅行の事前学習に来館しました。小学生は鎌倉方面へ、中学生は京都、奈良方面で寺院を見学するため、仏像の見分け方を学芸員が解説しました。

出張授業

東伊豆町立熱川小学校 2019年9月13日、下田市立大賀茂小学校 9月17日、

静岡県立稲取高等学校 9月18日、下田市立下田中学校 11月1日、

静岡県立伊東高等学校城ヶ崎分校 11月5日、6日、西伊豆町立田子小学校 11月13日、

西伊豆町立賀茂小学校 12月5日、11日、河津町立河津中学校 12月6日

修学旅行の事前学習で仏像の見分け方や、美術鑑賞教育の授業として、学芸員が出張授業を行いました。

講演

「南伊豆の文化財」2019年9月18日 南伊豆町役場・湯けむりホール

「下田の仏師 松本雲松」2019年11月23日 下田市民文化会館

当館の田島整主任学芸員が南伊豆町と下田市で講演を行いました。南伊豆町では、NPO南の風創生本部の依頼で、2018年に指定された南伊豆町の文化財について講演を行いました。

また下田市教育委員会主催の下田市史講座では、幕末の下田で活動した仏師、松本雲松の作品についてお話ししました。

調査活動

2019年9月27日、10月21日、11月18日 河津町寺院3ヶ寺

2019年10月28日 三島市寺院1ヶ寺

引き続き、河津町教育委員会との調査協力で、河津町内の寺院3ヶ寺で調査を行いました。今回の調査では、平安時代に遡る仏像や、江戸時代の年銘が記されている涅槃図を見出すことが出来ました。

また三島市では、みしまのお寺めぐりの会、寺院、地元の方の協力のもと、平安時代に造られた仏像の調査を行いました。



伊豆だより



アロエの花

今年は各地で台風の被害が大きく、19号、20号が直撃した伊豆も、停電や浸水の被害がありました。美術館は大きな被害はありませんでしたが、伊豆市共同企画展「伊豆をめぐる名画」は一日遅れでの開幕となりました。ここ数年は台風が伊豆を通ることが多く、昨年は被害を受けて中止となった、下田の白浜・アロエまつりが、今年は1月8日まで開催されます。赤い花をつけるアロエが群生する海岸では、鮮やかな花の景色を楽しむことができます。また須崎地区の爪木崎には、水仙が群生しており、下田の冬を彩ります。当館で開催中の展覧会「伊豆をめぐる名画」に展示中の、安田鞞彦の描いた水仙とともに伊豆の早い春を探してみたいはいかがでしょうか。

(櫻井)

見仏コラム



金剛力士像(阿形)



金剛力士像(吽形)

いつでも会いに行ける仏さま

修禅寺金剛力士像(平安時代) 伊豆市修善寺

仏像といえば、普段はお寺の本堂やお堂に安置されていて、拝観はちょっと敷居が高い。そんな印象を持つ方が多いのではないのでしょうか。でも実は、いつでも気軽に拝観することができる仏像もあります。路傍の石仏がよい例ですが、なかには木造で、しかも千年近い年月を経てきた平安時代のお像もあるのです。

修禅寺は伊豆市修善寺地区にある曹洞宗寺院で、弘法大師開創伝説を持つ伊豆を代表する名刹。この寺の山門を守るのが、ご紹介する金剛力士像(仁王像)です。二体一対で、開口する阿形像の像高が184.0cm、吽形像は182.5cm。阿形像は握った右手を下げて開いた左手を上げ、吽形像は開いた左手を下げ、独鈷杵を握った右手を上げる左右対称の姿です。筋肉が盛り上がる太い体軀はたくましく、諸悪をにらみすえたいかにも頼もしい姿ですが、間近で拝するといずれもお顔には愛嬌があり、特に阿形像の、耳の横で掌を大きく開くしぐさはどこかユーモラスですらあります。頭体の中心を一材でつくる一木造の構造や、古様な造形から平安時代後期の像と考えられます。伊豆最古の貴重な金剛力士像ですが、雨の日も風の日も、それこそ24時間365日、山門に立つのがお役目。夜間もライトアップされているので、いつでも誰でも、気が向いたときに逢いに行ける平安仏です。

かつての修禅寺は広大な境内地・寺領を誇り、修禅寺の大門は本堂から東におよそ3.5km、狩野川沿いにホームセンターが立ち並び、バス停「なめど大門」のあたりにあったといいます。本像はこの大門を守っていましたが、大門が失われた際、修禅寺橋の西方250mの横瀬神社に移坐、ここで明治の廃仏毀釈に遭い、修禅寺の指月殿に避難して長い時を過ごしました。落慶になった今の修禅寺山門に落ち着いたのは2014年9月のこと。長い流転の年月を送った本像ですが、今は誇らしげに修禅寺の入口を守っています。修禅寺をお参りする際は、是非入口の平安の金剛力士像にもご注目ください。(田島)

次回休館日は2020年1月14日(火)～1月17日(金)です(展示替えのため)

 上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間

9:00～17:00

最終入館は16:30まで

休館日

展覧会会期中は無休

展示替え日のみ休館

入館料

大人/1,000円、学生/500円

高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引